

さわやかな輝きを貫く

柳沢 明朗  
（元労働旬報社社長）

先生の還暦のときの「労働法と共に四〇年」の冊子をみている。時代の問いかけに応えて舞いに舞う中山さんの活躍が鮮烈にせまる。冊子に掲載された業績をみると「労働法律旬報」誌掲載の論文・座談会だけで一五〇余本あった。それは人間の尊厳・自由と権利のためのたたかいへの熱い熱い心情を隙間のない論理に包んだみごとな出来映えのものばかりだ。

奇異なことに気付く。論文は鉄壁に構築された建造物なのに人間の香りが滲みでている。社会科学が、まして法が、多様な感情やイメージが湧くということでは体系が成立しないわけだから、決して褒め言葉ではないなど先刻ご存じで敢えて言いたいのだ。もとより論理・論旨にブレがあるのではない。

私にはそのワケがわかる。著者の研究テーマと「人格の格調」が人間くさい香りの震源地と思うのだ。

中山さんは「人間が人間として生きる権利」その中核となる自由・人権・批判的精神の定着に奉仕しつづけた。いわば二〇世紀が創っていった人類史の価値を日本の土壌に植え付ける作業を、ほぼ、戦後の全期間をカバーして挑んだ。

そしてニクイことに、その貴重な作業を、実にさわやかにやってのけた。先生の燃えるような自由・権利感情の表現、論理の構築も含めてだ。パイオニアとして、さぞかし緊張する場面でも、国際的研究会議でも、闘う労働者の現場でも、ひきつった顔も粗野な論理も見えない。鋭い論理はいつも、笑顔で発信されてきた。先生を組合の幹部らと包囲して徹夜して判決批判を執筆していただいた場面も再三だが、素人の生意気な注文や批判に、軽蔑した態度をとった場面を私は一度もみていない。

人間への底なしの信頼とその故に持つ批判的精神があるからこそ、この態度がさわやかに貫けたし、侵害へたたかいを挑みつけてきたのだろう。そしてこれからも挑戦し続けるにちがいない。七〇年と言えば日本の近代の全期間のようなもの。論文はもとより業績だが、生き方において時代の母斑―批判的精神・自由を実にさわやかに表現し、人々や後輩に刻みつけた教えが、先生の最大の業績かと私は勝手に思い定めている。

**古稀を祝して**  
中山和久先生古稀記念

発行日 2000年1月7日

編集 呼びかけ人  
(清水 敏、島田陽一、木内洋育)

印刷 マチダ印刷